
慰めの花～タルジュ～

との。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慰めの花（タルジュ）

【Nコード】

N4643Q

【作者名】

との。

【あらすじ】

土星にしか咲かない花、タルジュ。

少年はその花束を抱えて、ある屋敷を訪れた――。

(前書き)

テーマ〈狂気〉企画、参加作品です。

旧時代、なんの変哲もない惑星に見えた土星は、その変わらぬ姿から『時』と『死』を司ると人々に信じられてきた。

その化身たる『白き神』は、土星人から最も信仰を得ている神であり、土星の環が氷で出来ていることから、『白き神』も『時』と『死』を司る氷の化身だと言われている。

『白き神』がいつも左手に持っている花、タルジュは、土星人にとってもっとも親しみ深いユリ科の花だ。

カメオは庭先に植えたその白い花の前で、膝を付いて胸の前で両手を組んでいた。

（なにも起きなければいいのに――）

無理な願いと分かっているながら、彼女は何度も祈った。今日は妹の誕生日。晴れやかなドレスを着て、明るい気持ちで祝ってやりたい。

だが、

すべては母の一言で終わったのだ。

「あの男の仲間が、すぐ傍まで来ている」

母は上目遣いで真正面を睨むように、宙に目を据えている。ぎろぎろと血走った、ものに憑かれたような凄まじい目だ。

二、三年前まで穏やかに微笑んでいた母とは思えない。

カメオは土星を象徴する白き神――その化身たるタルジュの花に強く願った。

今日一日を、無事に過ごせますようにと。



「これはアレン様。今日は娘のために、ありがとうございます。さ
さやかではございますが、宴の準備が出来ておりますので、どうぞ
お寛ぎください」

鈴の鳴るような声でささやいたエーリカ夫人は、三十前後のたお
やかな女性である。

小麦色の^{はだ}膚、グラマラスな肢体を紅のドレスでつつみ、エキゾチ
ックな目鼻立ちに収まった大きな琥珀色の瞳が、じっとアレンを見
つめている。

髪は肩口でバツサリと切り揃えられ、夫人が恭しく頭を下げると
剥きだしになった細い肩がさらりと零れた。

なるほど、噂に聞く“カガチ人”である。濃紺色の髪と、小麦色
の肌、琥珀色の瞳は、土星に住む少数民族、カガチの特徴なのだ。

アレンは夫人を見て、神秘的な人だな、と思った。

夫人の表情はあまり動かないのに、控え目に微笑むだけで空気が
華やぐ。男所帯のアレンには、あまり縁のない空気だ。彼女の上品
な仕草に、思わず萎縮しまう。

宴の会場となるリビングダイニングは三十畳くらいあった。そこ
に行く途中、長い廊下を夫人と共に歩いたが、彼女以外、誰の姿も
見ない。

（こんなに広いお屋敷なのにな？）

首を捻りながら、これも異文化故の違いかと結論付けて、アレン
は通されたリビングダイニングを見渡す。

爽やかな森を想起させる色合いだった。床は水晶を磨いたような
白い石で、壁は風雨に強い特殊樹脂を塗ったクリーム色。窓枠は緑
である。

調度類はすべて色彩が淡く、角に丸みがあって、まるで川底の石

をより合わせたような統一感がある。

アレンは部屋を見たあと、夫人をふり返った。

「あの……、エーリカ夫人のお嬢様は」

「隣の部屋で待たせています。お呼びになりますか？」

「お願いします」

言いながら、彼はまた首を傾げた。

今日の主役であり夫人の末娘であるシャモアを、“呼ぶ”とはどういうことなのか――。

こことは違う会場で主宴が開かれているのかとも思ったが、部屋の中央にある翡翠のテーブルには、所狭しとパーティ用の食事と飾りが並んである。

別階から人の気配も音もない。

場所は間違っていないようである。

夫人はしなやかな指を口許に当てると、娘を呼んだ。

「カメオ、シャモア。いらっしゃい」

「はい、お母様」

二つの声が重なって返ってきた。石の扉を開け、入って来たのは二人の娘だ。

一人が朱色、一人が桜色のドレスを着ている。夫人も紅色のドレス姿で、アオザイやチャイナドレスに近い、体の凹凸がはっきりと出るデザインだ。ドレスは年若くなるにつれ、色が淡くなっていた。夫人は朱色のドレスを着た少女を指して、言った。

「この子は長女のカメオ。気立てが良く、内気ですが優しい子です」
「カメオです」

長女は可愛らしい高音でボソリとつぶやいた。胸許で手を重ね、細い体を震わせて小さくなっている。軽くウェーブした濃紺の髪をショートにして、長女は上目遣いにアレンを見た。

怯えた視線だ。

「？」

アレンはこの長女が何に怯えているのか分からず、首を傾げた。

夫人が続ける。

「そして次女シャモア。この子は社交的で人懐っこく、元氣のある子です」

「どうも初めまして。シャモアだよっ」

末娘の次女は背が低く、濃紺の髪が肩から巻き毛になっている。はつらつとした声は張りがあって、表情が明るい。

アレンはそんな次女シャモアに、十二歳の誕生を祝う花束を渡した。

「これを」

「……わあっ！」

シャモアは琥珀色の瞳を丸くして驚いたあと、丁寧に花束を受け取った。

これこそ、彼の目的だ。忙しい父に代わり、アレンが娘の誕生日を祝いに来たのだ。

父は朴訥で冷厳な軍人であるが、プレゼントに選んだのはユリだった。ユリ科のタルジュという花。地球には生息しておらず、この土星でしか咲かない、白く可憐な花だ。

（珍しいことだ）

アレンは、これを渡すよう父に言いつけられたとき、そう思った。こんな洒落た花を父が知っていたことが意外だった。

父は剣術一筋、家の再興に人生のすべてをささげていると言ってもいいような男だ。銀河の1／3を掌握する巨大組織『銀河連邦』の中で、のし上がる努力を惜しまない男だ。

だからこそ、

「素敵なお花をありがとう、お兄ちゃんっ」

こんなにも可憐な——平和な一市民の少女たちと、どうやって知り合ったのだろうとアレンは心の片隅で思った。

次女シャモアは琥珀の瞳を目いっぱい輝かせ、可憐なタルジュのように、にこりと笑った。

その後、いくら時間が経ても客は来ず、家の者も居らず、結局夫人と二人の娘、そしてアレンだけの小さな宴が開かれた。

「それにしても——意外です」

「どうなさいますて？」

アレンはアットホームな空気に和みながら、首を傾げる夫人をふり返った。

「父は、恨みを買うだけの人間だと思っていましたから」

「滅多なことを。この屋敷に住む者は皆、アレン様のお父上に深い温情を受け、以来、恩を返すために日々を暮らしているのですよ」

夫人は眉間にしわを寄せ、鋭い眼差しでアレンを叱る。だが叱られたことよりも、アレンにとっては言葉の中身に対する興味の方が大きい。

「あの父が、本当に？」

「ええ」

「信じられない」

耳を疑うアレンを、夫人は不思議そうに見つめた。アレンは何でも無い、と首を振る。

人を褒めず、仏頂面で居丈高に物を言う——それがアレンの中の父の印象だ。

家を再興させるために、アレンが立派な後継ぎになるように、父はアレンが幼い頃から剣術を始め、格闘術のすべてを現在進行形で叩きこんでいる。五歳のときから母と別離させ、私生活でも甘えを一切許さないのも息子を最強の軍人に育て上げるため。

故に、アレンは十三歳の少年と思えないほどの卓越した剣術の腕を持っていた。まだ剣術に限って、であるが。

「母に合いたくば、私が認めるほどの軍人となって見せよ」

それが父の口癖だ。

母親が誰より好きだったアレンは、厳しい稽古の日々に何度も心折れそうになったけれども、父に「合ってよし」と言われるまでは、母に合う気はなかった。

母はいつも稽古で血みどろになるアレンを見ては泣き、父に「もう無茶なことをさせないで」と乞い願った。

そうやって母を泣かせる父に、アレンは負けたくなかったのである。

そして、母を泣かせてもなんとも思わない父を、血の通った人間と思えなかった。

だから父が、こんな風に誰かを——本当に、一個人を祝うためだけに奔走するとは、アレンは夢にも思わなかったのである。

厳しい以外の父の一面。

それに初めて触れ、アレンは父を、もっと知りたいと思った。いままでは分からなかった——母が愛した父の一面を知ることができれば、もっと父と、母を身近に感じられると思ったのである。

背の低い翡翠のテーブルには食事が並び、大きめの白いソファが周りを囲っている。

アレンは夫人に促され、ソファに座った。柔らかいソファだ。傍らに夫人が寄り添い、果実を搾ったものをアレンに手酌してくれる。香りはマンゴーに似ているが、色は透明で、飲んでみると味が無い。

「ナダ、と言います」

アレンがよほど不思議そうな顔をしてナダを飲んだからか、夫人はクスクス笑いながら説明した。アレンはナダの入った陶器を掲げる。

「これがですか？」

「ええ。私たちカガチにとっては馴染み深いものです。貴方が地球人にとっての、水のように」

「なるほど」

頷きながら、視線を姉妹に向けた。

アレンが食事をしている間、姉妹が舞を披露してくれているのだ。カガチの習慣は何も知らないが、二人の舞は、ひどく情熱的に見えた。

「——これではまるで、私の方がもてなされていますね」

本来ならば、こちらがシャモアを祝わねばならないのに。

申し訳なくアレンが視線を落すと、夫人は穏やかに微笑んだ。

「勿論ですわ。今日は、貴方の伴侶を決める日でもあるのですから」「え？」

「五年前。私たちを救ってくれた貴方のお父上に、私たちがそう約束したのです」

初めて聞いた話だった。

固まっているアレンを余所に、夫人が二つ、手を叩く。姉妹は舞をやめて、楚々と走り寄ってくると、こちらに向かって横一列に並び、アレンの前でひざまずいた。

夫人は穏やかに言った。

「長女、カメオは家事が得意です。律義な性格で、交わした約束はどんな事があれ守ります。このテーブルに並ぶ食事は、彼女が全て作りましたわ。今年で十六歳になります」

「次女、シャモアは踊りと歌が得意です。明るく開放的な性格で、先程の舞に合わせた音楽は彼女が作りました。願えばどんなものでも、至高の音に変えて楽しませてくれますわ。ご存じのように、今日で十二歳ですの」

「さあ。お気に召した方をお選びください」

「そんなことを……急に言われまして」

順に頭を下げる姉妹を見やって、アレンは当惑した。今日は父の代わりにプレゼントを届けに來ただけだ。——十三歳の少年が人生の伴侶を決めるには、あまりにも唐突過ぎる切り出しである。

アレンの当惑ぶりを見て、夫人はにこりと笑った。

「それでは今宵。どちらの娘を選ぶか考えられるとよろしいですわ」
夫人はタルジュの花のようになやかに踵を返して、部屋を後にした。

客間に通される途中、アレンは案内役の長女カメオに訊ねた。

「貴方も突然、この話を？」

「いいえ。私は十一の頃より、ガード様のお力となるよう母に申しつけられておりますから」

カメオはぼそぼそと答えた。“ガード”と言うのは、アレンの名だ。こんな僻地にまで妙な影響力を持っているのかと父にうんざりする一方、カメオが家のために婚約を迫られたのだと知り、彼は表情を暗くした。

「……すみません、こんなことに巻き込んでしまって。それも今日会ったばかりの相手と婚約なんて」

馬鹿げた話だ。そう言おうとした彼を、カメオは止めた。内気と聞いていたが、カメオはアレンの唇に人差指を添えて発言を止めた。大胆な彼女に驚いていると、カメオは頬を染めたまま、言った。

「私は自分が不幸と思いません。アレン様は母が教えてくれた通り、深いお慈悲をお持ちのようですから」

カメオはタルジュの花のように密やかに、慎ましく笑っていた。



「ねえ、お母さん。あれはどういうことなの？」

シャモアはリビングダイニングを抜けて、母の部屋に入るなり、

そう問いかけた。

また、“声”が聞こえる。――母の狂った“声”が。

シャモアが思わず眉間にしわを寄せると、母はシャモアの眉間をつんと人差指で突いて、笑った。

引きつった笑みで。

「あの男”の息子を油断させるためよ。――シャモアも見ただし
よう？ 私が娘をやると思ったときの、あの表情！　なんて無様な
のかしら！」

母がそう言って笑いだす。

紅のドレスで飾り立てた母は、素直に美しいと思えたのに、今は
母とよく似た他人が目の前にいるようで、心が痛んだ。

シャモアは、母のドレスの裾を握った。

「……あのお兄ちゃん、本当に事情を知ってるのかな？」

ナダのほかにも、地球人にとっては有害なモノを、母は姉の料理
にわざわざ混ぜて、テールブルに並べていたようだった。

本当は――ナダなど、カガチ人でも口にしない。神経毒があるか
らだ。

土星の水は二通りあり、鉱石に触れて成分が変化したナダは海底
で採れる。反して、シャモアたちの生活水となる水は、川から引い
て来たものであり、地球にある水とも遜色ないのだ。

昔居た“あの男”はそう言った事情にも精通していたのか、自ら
が口にする飲食は自前で用意し、シャモアたちの食事にはどうあつ
ても手を付けようとはしなかった。

それに引き換え、あの少年は、母に勧められるままに『ナダ』を
警戒もせずに飲んでいた。

不思議そうな顔をしていたが、『ナダ』の成分について知らない
ように見えたのだ。

だから、

（……もしかして、本当に何も知らないの？）
そう思った。

だが、昔の教訓からすぐに信じようとは思わない。少年が腰に差した刀が、不気味な存在感を放ち過ぎている。

あの少年はいつ、あの刀を抜くつもりなのか。

母はいつ、あの少年を手にかけるつもりなのか。

シャモアは緊張して、その緊張を振り払うように唇を噛んだ。

そこで母の笑い“声”が聞こえ、シャモアはハッと顔を上げる。

母は、ヒヒッと喉の奥で引きつけを起こすと、シャモアをふり返って言った。

「大丈夫よ、シャモア。今日で全部終わらせる。全部、全部ゼンブゼンぶ……っ！」

「……うん」

シャモアは焦点の合っていない母を見上げて、寂しげに頷いた。



客間に一人残ると、アレンはベッドで眠ろうとして、やめた。

カガチ人のベッドとは、風呂だったのだ。人一人ゆったりと入る水槽に、先程飲んだナダを満たしている。ここで、彼女たちは眠るのだと言う。

（ふやけるんじゃないか？）

一晩も水に浸かっているなど、地球人にはない発想だ。見た目が似ているからと言って、同じ存在ではない、彼女たちは『カガチ』と言う異星人だと思い出した。

彼は長い溜息を吐いてベッドではなく、ソファで眠ることにする。乱暴に身を投げ出して目を閉じると、姉妹の顔が脳裡に浮かんだ。「一体、何がどうなってるんだ……」

まるで現実味がない。今日という時間が質の悪い夢のような気がして、額に手の甲を当てた。

そう言えば、刀を振らずに一日を終えるのも初めてだ。

アレンはふと、腰に差した刀に触れた。黒鞘で無銘の刀だ。

——情けを捨てよ。

父の声が脳裡を掠める。

人を斬るために情けを捨てよ、と。

アレンには、五つの時から刀を握る義務があった。

木刀ではなく真剣。必ず、一日の終わりに父と真剣で切り結ぶことを決められている。死闘を身近に置くことで戦場の恐怖を、微塵も感じないように訓練されていたのだ。

アレンにとって剣の腕を磨くことは、習慣の一つだった。それが他人からすれば珍しいことだと、最近まで知りもしなかったほどに。科学万能の宇宙時代。

十五、六歳の子どもの一月分の小遣いがあれば、太陽系内の惑星ならすぐに行ける。そんな数百億の星々がひしめき合う銀河社会で、『宇宙人』と言うのはもう珍しくない。

その時代にあって、まだ刀など——。そう一笑に付されることも少なくない。

それでも、とアレンは思う。

幼少からの影響もあるだろうが、刀を握ると気分が凜とするのだ。銃には無い緊迫感を、刀からもらっている気がする。

だから今も、握っている。

「一体どういうつもりだ？ 父め」

アレンは刀を握りしめ、状況を整理するようにつぶやくと、しばらく凜とした気分を考えを巡らせた。だがどうにも、眠気が強い。思ったよりも疲れているのかもしれない。

アレンは仕方なく——眠った。

音。

音がした。いや——笑い声だ。誰ともつかない、けたたましい笑い声。

アレンは瞼を震わせ、うつすらと目を開く。

——青い。

思った。

床石が、暗闇で青く光っている。さしづめ蛍光塗料と同じ原理だろう。光っているのは分かるが、周りを視認できるほど明るくはない。

アレンは不思議な青の暗闇で、ゆっくりと起き上がった。部屋には照明がなく、窓枠から入る月明かりが頼りだった。それでも、光る石が床に使われているなど初めての体験で、彼の冒険心はくすぐられていた。

「すごいな……」

つぶやきながら、ソファから降りようと手をつく。

琥珀色の瞳と、目が合った。

暗くて何も見えないハズの部屋の中で、白い眼球が大きくせり出した琥珀色の瞳と。

アレンは目を見開き、息を詰める。

——見てはならない、と咄嗟に思った。

急速に悪寒が背筋を這い上がり、ひゅっと飲んだ息を吐き出せず、ソファにかけた手を素早く後ろに下げた。それでバランスを崩した

彼は背もたれで頭を打ち、痛みを感じるより先に、背もたれがあったことに驚いて、慌てる自分に更に慌てた。

どすん、とソファが揺れる。

その音で正気に戻った脳が、琥珀色の瞳——憎しみに燃えた憤怒の顔を捉えた。

「あつ、——」

首が激しく揺れた。絶叫する間もない。鋭い音。バチンツと肌が叩きつけられ、喉が急速に絞まった。アレンは目を白黒させながら首を縛る“何か”に触れる。

固い。

にたあ……、

強張った視界に、三日月状の笑みが見えた。禍々しい嗤い。血走った眼球の中で琥珀色の瞳が爛々と光っている。暗闇の中、青く照らされた女の顔がぼうと浮かび上がった。

ぎりぎりぎり、

首の締め付けが強くなる。彼は喉に力を込め、顔を歪めながら女から視線を逸らした。——見てはならない。震える理性がそう言う。固く瞼を閉じた。頬に風が当たる。いや、これは憤怒の顔をした女の息遣いだ。ふうふうと荒い呼吸で、生温かく触れてくる。

——見てはならない。

彼はそう思いながらも、わずかに目を開けた。

「！」

鬼女。

視神経、筋肉のすべてが凝固したように動かなくなった。肩まで伸びた濃紺色の髪。それは漆黒の闇を従えたかのように女の顔にへばりつき、異様な存在感を与える。見開かれた目。白い眼球が大きく

くせり出し、血管が膨れ上がって真っ赤に染まっていた。収まった琥珀色の瞳が、ギロギロとアレンを見下し、にい、と細まる。憎悪に燃え、見開かれた目が弓形状に平たく伸びたとき、蠱惑的な女の唇がゆっくりと耳まで裂けていった。

三日月状。

アレンは金縛りにあつたように動けない。

さあ……っ！

全身の血の気が引いた。

——お前が、

お前がお前がお前がつ！

その手で

——私の子を、

琥珀色の瞳が怒りでつり上がる。首が絞まった。急速に。

ぎりぎりぎりぎりっ、

まるで革ベルトを雑巾絞りするような悲痛な音だった。急速な勢いで視界が変化する。脳の景色がぐるぐると回り、床の青い光がぼやけ、体の奥から何かがせり上がって来る――

（死、）

“死ぬ”と自覚した途端、頭が白くなった。

――逃がさない。

女は確かに、そう言った。ゴロゴロと喉を鳴らし、彼を見下ろす。アレンの喉が半分ほどに細まり、骨がギリギリと悲鳴を上げた。血の通わない顔がみるみる紫に変色して行く。

意識が、遠退いた。



夜。

静かな闇の世界は、『ハガル』の恩恵を受けて、うつすらと青色に光る。

シャモアたちカガチ人は、夜行性だ。

屋敷に少年がやって来たのは夕方で、彼を客間に押し込めた頃にはもう、夜の帳が降りていた。

客間への案内役として抜擢された姉は無事だろうかと思いつながら、シャモアは燭台に火をともし、鏡の前で濃紺色の髪を梳く。肩から巻き毛になった彼女の髪は、しっかりとセットされているからか、

くしを通しても本来の直毛には戻らなかった。

(……あの子は、本当に私たちを殺しに来たのかな……?)

シャモアはタルジュの花を鏡越しに見つめ、首を傾げる。

考えるまでもないことだ。

“あの男”の子どもなら、こちらを油断させるだけさせておいて、牙を剥いて来る。

きっと、シャモアたちが寝静まった朝に。

それが常套手段だった。

大人しい顔をしていても、油断してはならない。シャモアは胸に置いた手を握って、自分に言い聞かせた。

(私はもう、騙されない)

それに、どうしても許せないのだ。

皆を殺すだけに飽き足らず、シャモアの母まで壊した“あの男”が。

今日で、晴れて十二歳になったシャモアは、誕生会の準備をしてくれた母と姉に感謝する一方、不安な気持ちを抑えきれずにいた。

今日の母の張り切りようは、ずっとシャモアのためだと思っていた。シャモアの成長を誰よりも喜び、誕生日を祝うただけに、その朗らかな笑みを見せてくれていると思っていた。——今日、“あの男”の息子が何食わぬ顔をして、この屋敷にやって来ると母から聞くまでは。

(ようやく、平穏な生活を取り戻したと思ったのに——)

嘆くシャモアと姉のカメオに反し、母は繊細で彫の深い顔立ちをこれでもかと歪めて、これedyouやく復讐が果たせる、と笑い声を上げた。

上品な母には相応しくない、甲高く、耳障りな声だった。屋敷を支えるハガルが、音を拾って母の笑い声を遠くまで響かせる。

シャモアは耳をふさいだ。その場にしゃがみこむ。

「……こんなの、私のお母さんじゃない……！」

何度違うと言っても、目の前の母が昔のように朗らかに笑ってくれることはない。シャモアの声は、涙で震えた。頭を横に振ると、長い髪が、頬を叩いてくる。

彼女は着たくもない桜色のドレスを着せられ、腰まで流れるまっすぐな濃紺色の髪を、少しでも男を狂わせられるようにと、母の手で肩から巻き毛にセットされたのだ。

理由さえ聞かなければ、母が久しぶりにシャモアの髪を触ってくれたことを、素直に喜べたのに、とシャモアは嘆いた。

貞淑で優しい母は、もう帰って来ないのだ。
改めて思い知る。

五年前、父と一族の皆——この土星に住むカガチ人の多くが亡くなったあの事件から、母は徐々に狂ってしまった。

——お前がっ！

そのとき、ふと母の“声”が聞こえて、シャモアは顔を上げた。
二階の客間——姉が押し込めた、あの少年がいる部屋からだ。
シャモアは鏡台から立ち上がると、客間に向かった。



……キン、

アレンは右手で握った刀を抜いていた。それもただ抜くだけではなく、両手で握り女を突き刺していた。

考えてのことではない。

磨き上げた戦闘習慣が、脅威を取り払おうと脊髄反射を起こした

のだ。

「ぐっ……！」

闇の中で、琥珀色の目が丸く大きく見開かれる。憎悪に満ちた瞳は閉じず——最期までアレンを睨んで転がった。ドツと鈍い音。喉を絞る力がゆるりと解け、重い何かが床に倒れ込んだ。

二度、三度、引きつけを起こしたようにアレンは空気を貪った。くひいい、くひいいと喉が鳴り、首を右手で触る。凹んでいた。黒々とした絞め痕だ。人の手でなく、紐のような長い物で絞められた痕。

血の通っていない、自分の白い手を見る。女の胸を貫いた肉の感触が、ありありと蘇った。

「あ、あ……！」

自分でも分かるほど、手が震えていた。止まらない。

そこで初めて、自分が女を殺したのだと自覚する。

心臓が、早鐘のように鳴った。

（ころ、ころッ、ころッ、殺っ——……！）

息を潜めて、蒼の目を見開く。

手にはびっしりと敷き詰めたかのような冷汗。

堅く、刀を握りしめた。

心臓が鳴りやまない。

殺される。

——殺した。

二つの相反する想いと、昂奮と緊張で頭の中がかき乱され、正常に思考出来ない。

傍らに、小麦色の塊があった。——大の字で倒れている。肘から先をふにやりと曲げて、目を皿のように見開いた夫人の死体だ。大

ぶりな胸から血がどろりと流れ、女の濃紺の髪を汚している。心臓を刺し貫かれた女は、三日月状につった口端から一筋の黒い血を零して、虚空を見つめていた。

床石が悲鳴代わりに煙を吐く。血溜まりで、石が溶けた。

「……っ！」

アレンは驚きの息を殺す。昂奮と緊張、そして恐怖が神経を逆撫でるように、鼻から吐く音を耳で拾わせる。

扉がまるで意志を持っているように、ゆっくりと開いた。

弾かれたように顔を上げ、アレンは声を抑えた。

月が、硬い石の床に妖しい影を引いた。

なま暖かい風が足下をすり抜ける。

「お兄ちゃんっ」

少女の弾んだ声が、アレンを呼んだ。息を飲む。まるで今、殺したその瞬間を垣間見たようなタイミングだ。殺されたのを、確認しに来たような。

アレンはひしゃげたソファに身を潜め、ガタガタと震えながら呼吸することに集中する。扉から踏み入る少女に目もくれず、膝を抱えて小さくなる。

少女は厚い唇から、ストローのように長い舌をチロチロと覗かせて、笑った。



ハガルで出来た石の扉を開ける前に、シャモアは察した。客間から物音がして、異臭が染み出てくる。

五年前にも嗅いだ、カガチ人の血の臭いが。

シャモアは物憂げに眼を伏せて、ドアノブに手をかけた。あの男の息子が、いつシャモアを襲ってきても良いよう、シャモアは自分

の足を変化させる。闇によく溶ける黒色の鱗は、すりすりと床を擦った。

シャモアはドアノブを捻った。きい、と臼を挽くような音を立てて、扉が開く。シャモアの後ろにある窓から、六十四個ある月の内、七つの月が彼女を照らして、部屋の中に薄い光を落した。

シャモアを象った影が、ハガルの床に描かれる。

「お兄ちゃんっ」

シャモアはわざと媚びるように、声を弾ませた。

心のどこかでは、祈っている。すべては杞憂であり、少年は襲い掛かってきた母を、一旦払いのけただけに過ぎないのだと。

だが。

部屋に入るとすぐに、白いソファ脇に転がった母を見つけた。

母は大きく目を剥いて、口の端から黒い血をこぼしている。心臓を一突きされ、どうやら絶命したようだ。大の字で倒れ、肘から先が変な方向を向いている。カガチ人は手や足、首を切られてもそこから再生できるが、心臓だけは元に戻せない。

あの男の息子は、そういう事情も知っていたのだろう。

シャモアは意外にも冷めた眼差しで、母の死体を見下していた。憎悪で塗り固められ、醜く歪んだ母の表情^{カオ}。

それはシャモアが好きな上品な母とは決定的に違って、シャモアは母とよく似た別人の女が、この場で殺されたのを見ているようだった。

（――ああ、そうか）

シャモアの厚い唇が、ゆっくりとつり上がる。冷めた心が、虚しい、とつぶやいた。それなのに、腹の底からざわざわと血が騒いでいるのを感じる。胸の奥に、熱がこもるような感覚だった。

（お母さんじゃ、なかったんだ。……最初から）

シャモアの故郷、ハイヤタウンを離れたその時から。

――ケ、けけケケッ！

シャモアは“声”を立てて笑った。



「いくら隠れても無駄だよ？　だって私たちはずうーっと、お兄ちゃんを待ってたんだもの」

すりすりと床を擦る音。アレンは息を飲んだ。――寒い。凍えるほど寒い。寒くて深く考えられない。

影絵が、きよろきよろと首を巡らせる。

距離、一メートル。

このままずっと、大人しくしていれば――
アレンは固く目を閉じ、祈った。

（――頼む、帰ってくれ……）

影絵が傍らを過ぎて行く。

部屋をそろそろと徘徊して、――諦めたようにぴたりと止まった。

………

静寂。

（――頼む、帰って、もう帰ってくれ……！）

アレンは祈った。溜息が聞こえる。

「いないのかな……」

と少女がつぶやいた。彼女は、すりすりと何かを引きずる音を立てて部屋を出て行く。

影絵が遠ざかる。

（――行った？　行ったのか？　……もう、いない？）

アレンはゆっくりと瞼を開けた。寒い。凍えるように冷たい。歯の根が合わず、唇がまったく一所に定まらない。

彼は顔を上げた。

ソファからゆっくりと顔を出してみると、一つ年下の少女が、彼を向いて琥珀の目をぎょろりと見開いていた。

「シャアッ！」

牙をすり抜け、少女が鋭く吐く。同時、アレンは引きつった顔で首を捻った。唾液が顔の真横を過ぎ、床石を溶かす。

だが、そんな様を悠長に見る暇などなく、彼は這う。這って這って、這いまわった。

指が、刀に触れる。

「！」

これで斬れば——思った途端、肉の感触が蘇った。夫人の死に顔。恐怖と緊張が体を縛った。斬るか、斬らざるか——彼は息を飲む。

迷っていられなかった。

死にたくない。

ただ、生きたい。

その想いが、躊躇を掻き消す。

彼は握り込む寸前、自分に言った。

（俺はもう——戻れないんだっ！）

裂帛の気合がアレンの喉を割った。闇に彼の刀がきらりと閃いた。少女の左肩から右脇腹を両断する。そんな殺人術を、彼は幼少から徹底的に叩き込まれている。

だが、

そこで——気付いてしまった。

鋼の刀身が、夫人の血で溶けていたことに。

千切れた刀が床にぶつかって、硬い金属音が立った。少女が分厚い唇をつり上げる。アレンを絞め殺しに来た夫人と同じ、三日月状の笑み。

「あ、ああ……っ！」

体が震える、芯から凍えたように、どうしようもなく止まらない。柄を取り落とした。

アレンは首を振りながら後ずさる。腰から力が抜け、尻から床に転んだ。

声にならない呼吸いきの塊を吐く。

涙が、伝った――

「お母さん、……返して？」

幼い少女は、妖艶な笑みを浮かべて首を傾げた。太い綱が、床を打ちのめす。鈍い音。アレンは這う這うの体で避けると、綱――のように見えた少女の下半身に驚いた。

「！」

蛇の尾だ。

二足歩行していた少女の足が、いつの間にか蛇の胴尾に成り代わっている。月明かりがあっても鱗は闇に沈んだように黒く、光を吸収する。滑らかな蛇の尾が少女の股の付け根から生え、一つの人頭蛇尾となっている。

蛇尾の威力は、へしゃげた床が物語った。

すりすり、蛇尾が床を這う。彼の首を絞めたのも、これだ。

「あ、ああ……っ！！！」

絶望で窓から射す一筋の月光が見えなくなっていった。世界が塗り潰され、黒い闇に覆われる。そんな感覚が、彼を襲う。石の淡い、青い光すら感じない。すべて黒く、琥珀色の目だけがその中で、爛々と光っている。

逃げようと這った。だがすぐ追いつかれる。

抑えられ、脚を絞められた。火花が散った。視界に。

――これが、カガチ人……。

冷静な誰かが、言った。また笑い声が聞こえる。――けけけくと。

アレンはギシギシと鳴る脚を放って、それでも逃げようと這った。足が千切れても構わない。どうにか――。

祈りは届かず、太い蛇尾が電光石火の勢いで彼の全身に巻き付き、縛り上げる。少女の黒い鱗の上に、彼の淡い金髪が広がった。

「ねえ、返してよ？」

少女は蛇の胴をうねらせ、音もなくアレンに顔を寄せると、左目を細め、右目をこれでもかと思開いた。

「貴方がやったんでしょ？ あそこに転がってるお母さん。他の一族のみんなと同じように、心臓突き刺して殺したんでしょ？ ねえ」

「……！」

胸、腰、腿を絞め上げられ、アレンは顔を歪めた。それでも、夫人の絞めより強くない。少女は微笑み、指先でそっと彼の首に残る、母の絞め痕に触れた。

「知ってるよ。……お母さん、急いじゃったんだよね？ だって毎日、貴方たちへの恨み言をつぶやいていたもの。どうやって殺すのが一番残酷かっていつも唸ってたわ。――私はね、考えたの。貴方が壊れるまで、ずっと弄んで――それでね。貴方の子どもを貴方のお父さんに贈ったらどうか、って。私の一族を根絶やしにしてお母さんを壊した――貴方のお父さんにね」

素敵でしょ。彼女はそう言って、細長い蛇の舌をちらつかせると、唾を一滴、彼の胸に落した。服が焼ける。ジュツと鈍い音がしてアレンは歯を食いしばった。

つんと鼻を突く肉が焼ける匂い。

胸板に一点、紅い爛れ。

少女は指を滑り込ませると、オレンジ色のマニキュアが付いた爪でアレンの服を切り裂いた。

「ううっ……！」

彼は少女の顔を見据え、力なく首を横に振る。声が出ない。ガタ

ガタと歯の根が震え、少女を凝視する。

怯えた蒼の瞳、

命乞いする顔――

少女は黒い舌を出し、笑う。

「ねえ、私とキスするとうなるか、知ってる？」

アレンは首を横に振った。無論、拒絶のために。白い胸板を滑る小麦色の指が、針金を縫り合わせたような身体の、田に割れた腹筋を抜けて臍をピンと弾く。

「硫酸をね、口の中にぶち込まれるようなものなんだって。――どんな感じかな？」

顔を白くする彼の前で、少女は無邪気に唇をペロリと舐めた。その透明な、生温かい唾液がゆっくりと近づいて来る。石を溶かす、酸が。

――やめろ！

彼の絶叫は吐きだされることなく――厚い唇が、彼の音を喰い殺した。

× × × × ×

長女カメオは自室で音を楽しんでいた。昨夜妹がくれた、新しい舞曲だ。カメオの屋敷はハガルで出来ているため、鼻歌を拾って遠く反響する。

蛇は夜行性だ。

人に比べて物はよく見えず、頭にあるピットと呼ばれる複数の穴を通して近くにいる動物の体温を感じ取る。故に、少年がいくら息を潜めても、シャモアにはすべて筒抜けだったのである。

カメオは妹の曲に合わせて、しなやかに舞う。
気分が良い。

——今日屋敷に来た少年が、カメオが望んだ通り穏やかな人間だったからだ。

（“あの男”の子どもだから、最初は私たちを殺しに来たんだろうって思ったけど……彼はきっと、そう言うのとは違うわ。今まで通り静かに暮していれば、あの男だって私たちを忘れるはず……。復讐なんてお父様たちが望まないもの。お母様もシャモアも、それに気付いてないだけ——）

カガチ人は基本的に争いを好まない。このように自分が気に入った曲に合わせて、舞うのが好きな種族だ。

円舞のステップを終え、カメオは首を傾げた。もう母も妹も働き始める夜だと言うのに、一向に動く気配が無い。近くに二人の体温は感じられず、どうしたんだろうとつぶやきながら、部屋を出た。

（許嫁か……）

少年の顔をふと思い出して、カメオは頬を赤らめた。五年前に一族を亡くして以来、カメオは恋愛をしていない。

恋に恋する乙女、と言うのもあるだろう——。

あの少年を見たとき、カメオは惹かれるものを感じた。

× × × × ×

事件は、シャモアが幼い頃住んでいた町『ハイヤタウン』に“あの男”が現れたことから始まった。

ハイヤトゥンに住むカガチ人は三千人ほどで、男の多くは町近くに流れる川を伝って狩りに赴き、女は木の実を収穫して生計を立てている。

“あの男”は始め、ハイヤトゥンで採れる『ハガル』という鉱石を、より効率的に採掘する技術を伝えに来た、といってシャモアたちの父に近づいた。

『ハガル』とは、現在シャモアが住んでいる屋敷の素材ともなっている青く光る白い石のことだ。暗闇の中でのみ青く光るこの石は、この土星では親しみ深い代物である。その見た目が美しいことから、他惑星では宝石として人気が高い。

土星は元々、地球に近い位置条件から銀河連邦加入を果たしただけの、経済的には貧しい場所だった。

太陽からほど遠いこの場所は、日中でも薄暗い、霧がかかったような灰色で空が覆われている。夜はほとんど暗闇の世界だ。六十四個の月が、頼りない光を地上に落とすものの、目で物を知覚する種族にとっては、この惑星は住むのに適していない。

また、陽が射さないこともあってか荒野が多く、有毒ガスで満たされた地域もあって、地球人からの評判は良くなかった。

土星の周りには衛星コロニーという地球人が住みやすい環境を整えた人工衛星があり、そちらの方が順調に栄えている。代わりに、『土星』というカテゴライズで、本星と衛星コロニーを統括した場合、統治権は衛星コロニーの人間に、ほとんどの実権が奪われている。本星に住むシャモアたちは、搾取される側にあるのだ。

そういった事情が絡んで、銀河連邦に加入こそしているものの、彼女たちの生活水準は決して高くない。

しかし慎ましいながらも、シャモアは本星での暮らしが不自由だと思ったことはなかった。少なくとも、衛星コロニー側は、生態系のまったく異なる本星には、一定以上の干渉をしてこない。

すべてが狂ってしまったのはやはり――、“あの男”がハイヤトゥンに現れ、一週間の時をシャモアたちと共に過ごしたことから始

まったのだ。

“あの男”は『ハガル』の採掘技術をカガチの男たちに教え、医療がまだ発達していない本星に、貴重な薬や機材を提供してくれた。それで住民の信頼を得たあと、三百人近い兵を率いてカガチ人を見境なく殺し始めたのだ。

あの当時は一体何が起きたのか、シャモアには理解出来なかった。だが、今を思うと“あの男”が町に滞在していたのは、ハイヤトウンの地形を知り、カガチ人がどのような生活を送っているのか、――自分がカガチ人を皆殺しにする上で、“洩れ”を無くすためにはどうすればいいのか、その下準備をしていたに過ぎなかったのだと分かる。

“あの男”は、この科学万能の時代で、宇宙航行すら実現した高文化水準を誇る地球人でありながら、わざわざ刀を使って多くのカガチ人を斬殺した。

銀河最強の人種は、『地球人』であると証明するために。

あの男が掲げる『ガード流』が最強の剣術であると証明するためだけに。

そしてシャモアたちのように、どうにか生き残ろうと逃げ惑ったわずかなカガチ人は、“あの男”を憎まず、あの男が犯した斬殺という罪を咎めるにとどまった。そしてあの男を説得し、共存の道を取ろうと語りかけたのだ。

そして――殺された。

説得不可能とカガチ人が悟ったときには、あの男は町を丸焼きにして、川さえも堰き止め、完全に湿気を取り除き、カガチ人が生きられない環境を作り出してきた。

シャモアたちは住み慣れた町を離れ、命からがら逃げた。執拗な追撃は実に三年にも及び、その間に同胞は殺され、ついにはシャモアと姉のカメオ、母のエーリカ三人だけが唯一の生き残りとなって

しまった。

そして、この三年間の逃亡生活を経て手に入れたのが、この屋敷だ。元は他の町に舞を披露するために、シャモアの先祖たちが建てたものなのだという。町に住む別種族の長はシャモアたちを憐れんで、ここに無償で住まわせることを約束してくれた。

姉のカメオは、ようやく平穏な暮らしができる喜び、ここで大人しくしていよう、と言った。

母エーリカは、何も言わず——精神的ストレスからか、いつも引きつけを起こしたように、不気味な笑みをこぼすことが多くなった。

——けけ、けケケッ、と。

それはカガチ人特有の“声”で、シャモアの脳に直接響いてくる。耳をふさいでも意味はないと知っていた。それでも——壊れた母を見たくなくて、シャモアはよく耳を塞いで小さくなった。

そして、気付く。

母が笑い“声”を上げるとき、かならず唇もわずかに動いて、怨嗟の言葉を吐いていることに。

——どうすれば、あの男たちを一番残酷に殺せるのか、と。

そして、今日は“あの男”の息子が屋敷にやってきた。

母は言ったのだ。

ようやく復讐が果たせる、と。

ならば、せっかく手に入れたこの屋敷の場所を“あの男”に教えたのは——そう考えて、シャモアはゆっくりと首を横に振った。

それ以上は考えたくない。

今日で十二歳。シャモアは、腰まで伸びる濃紺の髪に触れた。肩から流れる巻き毛をくると指先でいじる。

（そう……。私はもう、騙されない）

自分に言い聞かせるように、心の中でつぶやいた。

母が復讐するつもりであるなら、シャモアもそれなりの気概を持たねばならない。最初に何の警戒もせず、あの男を町に入れたのが、カガチ人にとつての最大の失敗だったのだ。

あの男が、何故息子をこの屋敷に送ったのかは知らない。だが、最初からこちらにも臨戦態勢であれば、早々遅れを取ることはない。

いくら『銀河最強』を気取ってみた所で、所詮、地球人の身体能力など、カガチ人に比べれば大したことはないのだから。

「カメオ、シャモア。いらっしやい」

いつもの母とは思えないほどの、凜とした鈴の鳴る声で、その日、母はシャモアを呼んだ。

懐かしい響きに、涙がこぼれそうになる。シャモアは弱い自分を振り払い、両手を握って、首を横に振った。

「大丈夫よ、シャモア」

姉が優しく、シャモアの両肩を抱いて言う。シャモアはわずかにうつむいて、深呼吸をしたあと、うん、とうなづいて、姉をふり返った。

顔を上げて、姉と目を合わせると――二人揃って、小さく笑い合
う。

「はい、お母様」

声を揃えた姉妹は、床と同じ『ハガル』で出来た白い石の扉を開けて、シャモアの祝宴場所になっているリビングダイニングに入
った。

――これが、アレンを招き入れる前の、シャモアの事情である。



血が飛ぶ。視界を覆うほどの大量の血。

「っ……！」

歯を食いしぼる彼の顔は、それまでとは明らかに変わっていた。紅い血が黒いカガチの血と交わる。

目を見開いた少女は、己の心臓に突き刺さった千切れた刀を見つめていた。

「そん、……なっ……！」

アレンは自分の指を斬り落とさんばかりの勢いで刃を鷲掴み、少女の胸に突き刺していた。怯え、焦り、恐怖——そう言った負の感情を全て削ぎ落し、暗い蒼の瞳で少女を睨んでいる。

白い煙が立った。アレンの右腕が黒い血を浴びて爛れて行く。構わず、彼は刃で少女の心臓を十字に裂いた、何度も、何度も。

少女の瞳がぐるりと回る、それでも刺した、びくんと少女の腕が痙攣する、まだ決った、少年の全身を縛る蛇の力が抜け、だらりと床に落ちる、また刺した、黒い血が抜け、床に広がる。

アレンは相手が完全に事切れたのを確認するまで、千切れた刃から手を離さなかった。

「はぁ……、はぁ……っ、……はぁっ……！」

肩で荒く息をしながら、アレンは呼吸を整える。齧られたチーズのようにボロボロになった刃を捨てた。両腕が、ささくれた竹のようになり、見る影もない。

（あと、一人……）

ぼやけた思考の中で、つぶやく。青い闇の中で、蒼の瞳が暗く底光る。

——心配がした。

客間の入口に駆けて来る気配。アレンはソファの傍に置いてあるテーブルから燭台を手取る。蠟燭はなく、むき出しの切っ先が三つ、月明かりで鈍く光る。

客間に現れた三人目の女は、血溜まりに倒れた自分の妹と、ソファ脇の母親を見るなり目を見はらせた。

少年は駆る。

——耳は、何の音も拾わなかった。

カガチ人の水——『ナダ』。

それは地球人の神経を侵食する、毒。

三人目の女は何事か泣き喚いた後、ケラケラと嗤った。

燭台を握り、女に向かって駆けながら彼は思う。——ああ、これか。先程から聞こえていた笑い声は、これだったのかと。

女は——長女カメオは、血の涙を流して笑った。

「どうしても……——どうしても貴方々が許せぬのです！」

ケラケラとけたたましい声を上げた長女は、太い蛇尾を出現させると、電光石火の速さで少年の首に巻き付けた——。

× × × ×

「リード様」

部下に呼び止められ、アレンの父は足を止めた。折り目正しく着こなした軍服の下に、引き締まった体軀がある。人間の体脂肪率を極限まで擦り減らした男の眼差しが、鋭く部下をふり返る。

「先程、アレン様が無事に戻られたようです」

「……ほう！ ついにやりおったか、あやつめ！」

父は口端を三日月状につり上げると、満足そうに喉を鳴らした。左手の窓から空を見上げる。陽が昇ったと言うのに、蒼い空の中にまだ、白い月が座している。

父は部下に問いかけた。

「人を喰うのは何か、知っているか？」

突然の問いに、部下は当惑しながらも答えた。――欲、でございましょうか？ と。

父は一層笑みを深くしながら、首を横に振る。

「鬼よ……。人を喰らうは、古来より鬼の所業。情けを捨てれば、鬼の道を行く一歩となる」

「……鬼の、道……」

「そう。そして人の上に立つ者も、鬼でなければ務まらぬ。だが、あれは甘い。剣の腕は一流でも、情けをいまだ捨てきれずに居る。人のままでは、世に跳梁跋扈する鬼どもとは渡り合えぬというのになれば、あれの人の部分を、一人前の鬼に育て上げるのが親の務め。此度は、そのための試練ぞ」

父は残月を見上げた。――カガチ人は、地球人が今だ解析できない特殊な会話法にて意志疎通を図る。その術を戦場に持ち込まれては、父の率いる軍勢が、甚大な被害を受ける火種となるのだ。

銀河最強は、『地球人』でなければならぬ。

情を捨て鬼と成った父は、脅威に対して一切手を抜かない。故に、

父は喉を鳴らして笑った。机に花を一輪、差してある。

「蛇の生殺しは人を咬む、か……。覚えておかねばな」

× × × ×

「どうして……?」

アレンは問う。

目の前に長女がいた。その場に蹲り、両手で顔を覆って泣き叫ぶ長女が。

「どうして俺を——」

殺さない?

彼の問いに答えず、首に巻き付いた蛇尾がゆるりと解けた。くず折れたアレンは、長女をじっと見据える。

「ふ、ふふ——」

長女が喉を鳴らした。

顔を覆っていた手を退けて、長女は静かに喉を鳴らす。

アレンは床に手をついて、咳き込みながらも体を起こした。両腕は崩れて原型がなく、わずかな接触でも激痛を伴った。

長女は嗤い——微笑んだ。

タルジュの花のように密やかに、慎ましく。

「ねえ、お母様。そろそろお夜食の時間ですよ、起きて下さい」

長女は朗らかに、ソファ脇に倒れた母の下へ歩み寄った。蛇尾は人の足へと姿を変え、アレンが屋敷を訪れた時の姿で、母に話し掛けている。

物言わぬ夫人へ。

「今日はフリーズからジャムを作ってみたの。お母様が好きなフリーズの実よ。シャモアが昨日採って来てくれて——あ、そうだ！」

お父様にもおもてなししなくちゃね。遠出の狩りに出て行かれたから、きつとお腹がすいているわ。バルマーイのソテーなんかいいと思うんだけど、どうかな？」

アレンはうすら寒いものを感じながら、長女に声をかけた。

「おい、その人はもう——」

死んでいる。

俺が、

——殺した。

直接言えなくて、アレンは唇を引き結んだ。喉が熱い。ずっと凍えていたのに、今はとてつもなく熱い。

彼は何も考えられなかった。長女は、妹が作った曲を歌いだす。流麗で穏やかな旋律。黒い血と、青い闇と、見開かれた琥珀と、肉塊と化した小麦色がなければ——きつと美しく響いた音。

その姿を見て、彼は不意に理解してしまった。

自分が何故、命を狙われたのか。

父が一体、彼女たちに何をしたのか——。

「——ねえお母様、シャモアの新曲お聞きになった？　すごく穏やかで流麗なの。きつと皆も気に入るわ」

拳を握った。

アレンは強く、拳を握りしめた。

彼女を壊し——狂わせ、失わせたのは——他でもない、

「ねえ、綺麗でしょう？　シャモアはね、こんな子どもっぽい曲だって言って、続きを作ってくれないの。でも、私はとても気に入ってるわ。——ねえお母様、今度のお祭り、この曲はいかがかしら

」？

長女の弾む声を聞きながら、アレンは項垂れた。

（――すまない）

謝っても無駄だ、殺した事実は変わらない。変えられない。

彼女を壊し、

彼女から母を、妹を奪ったのは――

（――俺は、貴方の――）

あの時大人しくしていれば、こんな姿を見ずに済んだ。

だが――何も知らないまま、アレンは死を選べなかった。きっと

――全てを知った、今でも。

「ねえ、お母様」

――コ……テ、

カガチ人は、地球人が今だ解析できない特殊な会話法にて意志疎通を図る。

アレンは視線を上げ、どこからともなく聞こえて来る“声”に耳を澄ませて――、顔を引きつらせた。

「庭のタルジュがね、少しずつ芽吹いて来たの」

（――出来ない、それだけは）

彼は首を振った。

――コロし……テ、

唇を噛んだ。

——視界が滲む。

——情けを捨てよ。

父の言葉が脳裏をかすめる。

アレンは震える手で、燭台を握った。だが彼は、これを振り下ろす覚悟など——ない。

——オネガ、イ……

“声”が言う。

「たたか、って……くだ、さい。あなたに、情けがあるのなら」

次第に、長女の瞳が光を取り戻し始めた。

その琥珀の瞳が合った途端、彼の震えがぴたりと止まった。

（情けが——……）

アレンは心の中でつぶやき、燭台を握りしめた。蒼の瞳が、力を宿す。長女を見据え返した。

長女はタルジュのように穏やかに微笑み、自分の足を蛇尾へと変える。

そして——高く、鋭く威嚇の声を吐いた。

迫り来る蛇尾を見据え、アレンも駆る。

青い闇の中に、黒い血が飛ぶ。

心臓を貫かれた三人目の女が、どっと――石床に倒れて動かなくなる。

アレンは闇の中で女たちの遺体を見据えて――、拳を握った。固く、固く。

月が薄く、青の闇を照らしだす。

彼は月を見上げ、喉が割れんばかりに、吼えた。

――ありが、とう……

蛇の夜は、こうして終わりを告げた。

土星でしか咲かない花、タルジュ。

シャモアの誕生日にアレンが渡したこの花自身は、『希望、慰め、逆境のなかの希望』の象徴だ。

だが、この花はある行為によって、その意味が大きく異なってしまう。

アレンはタルジュを、どうあってもシャモアに贈るべきではなかったのだ。それは土星人の中では常識だった。

なぜなら、このタルジュを他人に贈った場合、

『貴方の死を、望みます』

× × × ×

「よくぞ情けを捨て斬った、アレン……！」

父と立ち合う、いつもの道場で。

アレンは固く、拳を握りしめた。同時に振り切る。

轟音が立った。

みしみしと音を立てる己の手。父が目を見開く。繰り出された息子の拳を、片手で握った。だが、止めた父の掌から、白い煙が立ち昇る。肉を焦がす程の衝撃。それほど鋭い、息子の正拳突きだった。

「何のつもりだ、アレンよ」

「……………故に斬ったのです……」

「なに？」

震える声でつぶやく息子に、父は首を傾げた。

途端、

澄んだ蒼の瞳が、怒りを湛えて父を睨む。

「情け故に、斬ったのです!」

圧倒的な剣気。

アレンの気迫に押されて、父はわずかに目を見開いた。凜と、道場に静寂が舞い降りる。

汚れを知らぬ蒼の高潔さは、父にタルジュの花を想起させた。

旧時代、なんの変哲もない惑星に見えた土星は、その変わらぬ姿から『時』と『死』を司ると信じられてきた。

その化身たる『白き神』は、いつも左手にタルジュを持っている。このタルジュを他人に渡すということは、貴方のもとに白き神が早く来るように、とのメッセージ性を持つことから、個体では『希望、慰め、逆境のなかの希望』という花言葉の花が、他人に渡されたときにのみ、

『貴方の死を、望みます』

という性格を得るのだ。

土星の象徴たるその花は、白く、清らかなユリ科の花。それは風にそよいで、月の下で可憐に咲く。

× × × ×

銀河連邦には、ガード家、と言うものが存在する。

それは軍人の家系ながらも鳴かず飛ばずの弱小家系だ。星の数ほど存在する、塵芥の寂れた家に過ぎなかったのである。

だが、

事態は当主リード・ガードの息子アレンが、13歳になったときから急速に変化した。

リードの敵は、連邦に『敵対する者』だけでなく、連邦の『脅威』となり得る存在――つまり、連邦傘下にありながら連邦が不利になるような発言をする者――そのすべてである。

それは、生粋の汚れ役だった。

その刺客として送り込まれたのが、鬼才とまで謳われた彼の息子、アレン・ガード。

アレンは剣術で父をも上回り、父の対抗馬となる者を、連邦にとって不都合な存在を、次々と斬り捨てた。

彼は父のすることに疑問を抱きながらも、では、己がどうするかとが正しい行いと言えるのか――母を迎えに行くという約束を、途中で違えてしまつて本当にいいのか――、その答えをずっと見出せずにいたのである。

リード・ガードは、そんな息子の懊悩を余所に、地位を手に入れた。

銀河連邦軍正規闘術『ガード流』総帥という確かな地位を。

それを皮切りに、アレンはガード家を去った。年齢にして十六歳。今より三年後のことである。彼はカガチ人と同じく、父に完全に愛想を尽かしたのだ。

代わりに父は地位を、アレンとは腹違いの息子、次男セイルをガード家の跡取として正式に据えることで落ち着いた。

アレンが父との道を離れた切っ掛けは、銀河連邦の“英雄”と称賛される男、ヴィスコムと出会ったためだった。

アレンはそれまで『軍人とは連邦のために尽くすこと』がすべてだと父に教わってきた。

だが、ヴィスコムと出会い、数々の任務を共にこなしていくうちに、『民間人を護ることこそが軍人の勤め』という生き方を学んだ。アレンはそれまで犯してきた多くの過ちを自覚し、己の所業に震えながらも剣を取り、愚直なまでに『民間人を護る』ことを固く決意したのである。

これこそ、軍人のあるべき姿と確信して。

そして彼は、いつしか周りの人間にこう呼ばれるようになった。

“連邦の双壁”と。

（後書き）

以下、「テーマ〈狂気〉企画、参加作品」について御紹介します。

1、後藤詩門さん作 「地獄の島」

赤道上には、地獄の島、と呼ばれる灼熱の小島がある。

そこに棲む怪物を一目見ようと立ち上がった駆け出しジャーナリスト、千堂剛は、彼の身を案じて一緒についてきた恋人の道子と島を散策する。

うだるような暑さとだだっ広い荒野。それ以外は何もない島の山頂を、ぐずる道子をなだめながら、剛は目指す。

山頂で彼等を待ち受けるものとは――？

何の変哲もない日常から、非日常へとゆっくり進み、最後のどんでん返しに思わず膝を叩いてしまうこの逸品。

一風変わったホラーと狂気を味わいたい方、是非ご一読あれ。

2、霜月璃音さん作 「薔薇の箱庭」

――薔薇の箱庭に、楽園の種が、一つ。

ある仲の良い兄妹は、箱庭と呼ばれる庭で声を弾ませた。

花屋の店主である兄は赤いペンキで白いバラを鮮やかに塗る。バラが常に美しく、より気高くあるようにと願いを込めて。

そこに潜む兄の想いとは――？

バラを始めとした色とりどりの花々。幻想的な箱庭の狂気を覗いてみたい方、是非ご一読あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4643q/>

慰めの花～タルジュ～

2011年7月18日03時37分発行